



第35号(2024年秋号)
発行日 2024年11月27日
信州大学教職支援センター

Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター ニュースレター

巻頭言

部活動の地域移行

～長野県はどうなっているの??～

教員の働き方改革が叫ばれて久しい。その対策の一環として部活動の地域移行が進められている。日本の中学校教員の労働時間の長さは世界的にみても突出しており、その労働時間を押し上げている一つとして「部活動」が挙げられる。土日を含めて、休日なく働く中学校教員に適正な労働環境を整備するためには、こうした改革も必要となってくるのは首肯される。ただ、部活動が担っていた教育機能について考えるとき、いかに地域移行を進めればよいか。

教育機能の保全を図るため、まずは地域移行によるデメリットについて整理したい。例えば、費用や場所の問題、指導者の問題、大会の参加資格等があげられる。これらをどのように解決するか。長野県では、国の「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」(令和4年12月)をふまえ、「長野県中学生期のスポーツ・文化芸術活動指針」(令和6年3月、以下、前者を長野県指針)を策定した。原則として、休日・平日ともに、全ての学校部活動を新たな地域クラブ活動へ移行し、地域の実情に応じ、令和8年度末を目途に休日の学校部活動の地域クラブ活動への移行完了を目指すとしている。では、新たな地域クラブ活動とは、どのようなものなのだろうか。長野県指針では、これからの地域クラブ活動とは社会教育法上の「社会教育」の一環として、また、スポーツ基本法や文化芸術基本法上の「スポーツ」「文化芸術」として位置付けられるものとされている。生徒が生涯にわたってスポーツ・文化芸術に親しむ機会の確保のため新たな地域クラブ活動を行う環境を速やかに整備することが明記されている。

一例として松本市では「まつもと子どもチャレンジクラブ」(通称、まつチャレ)という名称を掲げ、地域移行を進めている。公表されている「中学生が参加できるスポーツ団体一覧」(令和6年9月13日現在)を見てみると、多様な地域クラブが掲載されている。軟式野球を例にとってみると、市内5つの地域に分け、数校の中学校による合同チームで休日のみ合同部活動による委任指導の体制をとり、中体連主催の大会に合同チームで参加することになっている。平日は在籍する中学校で部活動時間に活動している。地域クラブの指導者については「公認スポーツ指導者資格取得推進事業」によって指導者資格の取得に係る経費の補助などが行われている。新しい地域クラブの創設も促されているというのが現状である。

地域移行は、一歩ずつ進められている。地域の実情によって指導者の確保が困難であったり、クラブ活動の種類や運用が異なってしまうと、問題が浮上することだろう。生徒の側、保護者の側へ丁寧に説明し、納得感のもとに地域移行を進めることが大切な課題となる。長野県指針の冒頭に示された「スチューデントファースト」(学習者本位)という理念をいかに実現していくのか。これから教師を目指す学生たちとも考えていきたいテーマである。



(参考資料)

長野県教育委員会「長野県中学生期のスポーツ・文化芸術活動指針」(令和6年3月)

松本市・松本市教育委員会「松本市部活動地域移行推進計画」(令和6年2月)

松本市「中学生が参加できるスポーツ団体一覧」(令和6年9月)

松本市「まつチャレ公式ホームページ」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/site/chilkiikou/>(最終閲覧日 2024年10月18日)

橋本 萌(教職支援センター 助教)

教育実習を終えて

人文学部 人文学科

歴史学コース 4年

和田 菜摘

教員になるという決意がより一層強くなりました

母校での教育実習に臨むにあたり、人前に立つことへの緊張と不安を感じていました。私自身の中学時代の経験や、現代の生徒たちとの世代間ギャップに対する戸惑いもありました。しかし、勇気を出して挑戦したことで、大きな学びと子どもたちへの深い愛情を得ることができ、教員になる決意がより強固なものとなりました。

主に2年1組を担当し、他学年や特別支援学級など、様々な生徒との関わりを持つ機会をいただきました。

最初は緊張していましたが、積極的に生徒たちと関わることで、一人一人の個性や輝きに触れることができました。指導して下さった先生の配慮により、朝と帰りの会で「和田先生のお話」の時間を設けていただき、生徒たちとの距離感を縮め、お互いの信頼関係を築きたいと思い、生徒たちに私自身を知ってもらおうという「私」を語る活動をしてみました。天候の話から始まり、日々の出来事や趣味、失敗談など、様々な話題を共有することで、生徒たちとの距離が自然と縮まっていきました。

また、生活記録へのコメント記入という貴重な機会をいただき、一人一人の生徒と丁寧な対話を重ねました。普段は控えめな生徒も、記録上では活発にコミュニケーションを取ってくれ、文章量が増えていく様子に喜びを感じました。

印象深い出来事として、ある女子生徒との関わりがあります。

実習最終日、その生徒を含む多くの生徒たちと感動的な別れを経験し、教師という職業の素晴らしさを実感しました。生徒たちの成長に寄り添い、支援することが教師としての喜びであり、使命なのだと強く感じました。

この実習で得た経験は、私の教育観を大きく変えてくれました。指導教諭をはじめとする教職員の方々の温かいサポート、生徒たちとの心の交流を通じて、教育という営みの素晴らしさを実感することができました。今後も学び続け、生涯をかけて教育に貢献していきたいと考えています。

最後に、支えて下さった教職支援センターの皆様への感謝を申し上げます。残りの学生生活も、教員になるという目標に向かって精進してまいります。



配慮と工夫の多さに

驚きました

理学部 数学科
数理科学コース 4年

坂田 一



私は母校である大阪市立三稜中学校で、3週間の教育実習に参加させていただきました。主に2年生の学級と授業を担当させていただきましたが、生徒たちは非常に元気で、関わりやすく、とても充実した日々を過ごすことができました。教育実習で特に苦戦したことは二つあります。

まず一つ目は、生徒の興味を引くことです。私は塾講師の経験があり、その経験を活かして授業を行えると考えていましたが、実際には生徒の勉強に対するやる気や興味を引き出すことに大変苦勞しました。そこで、授業の導入として、日常生活に関連づけたアニメーションを作成したり、数学とは関係のなさそうな話題から授業を始めたりと、様々な工夫を凝らしました。その結果、生徒たちから「面白い!」という反応を得たり、「どうやって作っているの?」といった興味を引き出すことができ、やる気を引き出すきっかけを作れたのではないかと思います。

二つ目は、様々な生徒への配慮です。集中力を維持することが難しい生徒、プリントを書くことが苦痛に感じる生徒など、様々な生徒がいることを改めて実感しました。その中で、私は特に授業の板書の仕方や授業プリントの情報量について深く考えました。板書に関しては、生徒が見返した時に授業を思い出せるよう、計算の手順に色をつけるなどの工夫をしました。また、授業プリントについては、最初は自分が伝えたいことをすべて詰め込んでいましたが、授業を進める中で、情報を絞り、特に重要な点に焦点を当てることで、生徒たちが覚えるべきポイントを明確にしました。

その結果、生徒たちは「これだけは覚えよう」と努力してくれるようになったと感じました。また、授業とは別に、私はバスケットボール部の部活動にも参加させていただきました。実習先の部活動では、生徒の自主性を尊重する指導方針が取られており、生徒たちが自ら考え、行動する姿が見られました。私が参加した時期には1対1の強化期間であり、顧問の先生がテクニックを教え、その使い方や攻め方は生徒自身が考えるというスタイルでした。最初は戸惑っていた生徒たちも、数日後にはテクニックを自分のものにしており、その吸収力の高さに驚かされました。生徒たちの成長を目の当たりにし、教師としてのやりがいを感じました。

このように、実際に生徒と関わることで得られた貴重な経験と、実習校の先生方からのアドバイスには深く感謝しています。3週間という短い期間でしたが、非常に充実した時間を過ごすことができ、私にとって大きな力となりました。



教職支援センター9～10月の動き

○教職実践演習授業参観 { 松本地区 (9/10, 9/25), 工学部 (10/7～10/16),
農学部 (10/8), 繊維学部 (9/4)

○長野県教育委員会との連携協議会 (9/3)

○教職教育部会 (9/17)



地域連携パートナーからのメッセージ

「斜め上の大人」の重要性

松本市立旭町中学校
校長 林 邦彦

「いつも人とあまり話さない生徒、まして初対面の人と話すなど難しい生徒が、初対面の大学生と好きなスポーツ選手のことを嬉しそうに話していたんですよ。」(校内支援センター支援員)、「休み時間に大学生を囲んで生徒がニコニコ話しているのを何回も見ました。」(A担任)、「自習の時に、あんなに進んで大学生に質問するのかと驚きました。」(B担任)

旭町中学校では、教育を取り巻く状況の変化を背景とした多様化する生徒への対応のため、多様な背景をもつ人が関わることで、生徒にとって魅力的な学習環境づくりを進めたいと考えました。その取組の一つとして令和6年度より信州大学教職支援センターの地域連携事業を活用し、週1~2日、2名の信大生に関わっていただいています。



<令和6年度1学期の主な活動>

- ・校内教育支援センターでのメンターの役割
- ・授業、行事での個別支援
- ・休み時間の雑談相手



生徒が教職員ではない「斜め上の大人」との関わりを通し、自己有用感や自己肯定感の高まりを期待していましたが、上記の教職員の声にもあるように生徒たちは積極的な姿を示し、期待以上の成果を得てスタートできたと感じています。特に、教師に対して心が開放的になれない生徒にとって、大学生と雑談したり、学校生活への思いや愚痴を伝えたりする機会となり、学校生活の楽しみの一つになっているようです。

また、学校の課題の一つでもある「教職員のゆとり」をいかに生み出すかに関わって、教室で生徒に寄り添う学生さんの姿が、生徒指導等に係る教師の心理的負担の軽減になっているという声も寄せられています。

7月終わりの暑い日、二人の学生さんと2学期以降の活動について話し合う場にて、「放課後の学習支援をやってみたいです。」「授業のサポートをします。」学生さんたちから積極的な申し出をいただきました。学校、学生さんにとって今後さらにWIN-WINの取組になっていくよう工夫をしていきたいと思います。

編集後記

今号では、学生たちの教育実習や学習支援の様子をご紹介いたしました。紙面でご紹介していない学生たちも、教育現場での子どもたちとの関わりを通じて、教師としての知識・技術の修得に加えて、人間的にも大きく成長している姿が見られています。こうした学生の成長には、私たち教職支援センターの教員も励まされます。

(広報担当 横嶋敬行)